

「復興」と東京オリンピック

～伝えることばを編む条件～

シンキング・バーズ
日本語研究班聖なる炎と
ボクたちの願い

●オリンピックと聖性

オリンピックの聖地と言え、ギリシャのアテネです。「聖火 (Olympic flame)」と呼ばれる炎が、女神を祀るオリンピアの丘で、古代の衣装をまとった女性たちの手で採火されます。非公開の厳かな儀式と聞いています。その聖火は、開催国に運ばれ、開会式に向けて各地を回り、メイン会場の聖火台に点火されます。2020年には、その聖火が東京に灯ります。

「平和」のシンボルとしての聖火は、言うまでもなく神聖な (Holly) 炎です。選手や役員たちは、その神聖さに誓いを立てて、力と技を競い合い、公正な審判に努めます。選手や役員たちには、一つの神聖さが求められるのです。

●東北地方と東京オリンピック

東京オリンピックと東北地方が、ことばとしてどのような関わりを持てるかは、微妙な課題を含んでいます。東京都とJOCが誘致したイベントに、脇からとやかく言うのは筋違いです。しかし、「まあ、頑張っ
てね」「それなりに応援はするよ」では、距離をとり過ぎのような気がします。

東京オリンピックの誘致にあたって、「東日本大震災からの復興」が、一つのアピール・ポイントだったと聞いています。結果的に、いくつかの競技の東北地方開催が決まり、形式的にはその要件を満たしたことはなりました。



ところが、東日本大震災からの復興は、まだ途上にあります。また、その後に数多くの自然災害に見舞われた日本は、復興途上の地域をいくつも抱えているのが実情です。開催までの3年間に、新たな自然災害の被害地域が発生しない保証は、どこにもありません。

このような状態で、「東日本大震災からの復興」を、どのようなことばで伝えれば良いかという問題は、東北地方に暮らす身としては、単純ではありません。

●「冷たい」オリンピック？

オデジャネイロ・オリンピック閉会式での、次期開催地・東京のプレゼンテーションは、ボクとしては、かなり違和感の大きいものでした。デジタル志向のプレゼンテーションの度が過ぎて、いわゆる「クール・ジャパン」の冷たさが弾けている印象を受けたのです。リオがホットだっただけに、余計にその印象を際立たせたのかもしれません。「温もり」が感じられなかったのです。「あっ、これが今の日本なんだ」と思いま

した。「思いやりに欠ける国・・・」

東北地方はご承知のとおり、そのデジタルさより、はるかにアナログです。アナログの良さが東北地方の良さ、という側面さえ持っています。仮に東京オリンピックで、東北地方の良さをアピールする機会があるならば、やはりデジタル変換せずに、東北の夏まつりの明るさで伝えるのが最も適切だとボクは思います。

しかし、ことばとして東北地方の「復興」をどう伝えるかは、浴衣を着て踊ることとは別問題なのです。

●「復興」への一つの視点

ボ

クたちの人口問題研究班は、東日本大震災翌年の2012年11月に、東北地方の「復興」について『東北地方の人口減少と未来』と題した小論をまとめました。以来改訂を重ね、2015年5月の第3版が、最新版になっています。当時はまだ、東京オリンピックの誘致は決まっていなかった。

小論は、東北地方の人口減少と高齢化を踏まえ、「復興」のグランドデザインを描いて、産業振興策を提示したものでした。その要旨は、次のようなものです。

1. 広い東北地方で、大小の経済圏ごとの核となる都市の振興を図る。
2. 各都市の振興には、グリーン&スモールの方針に基づき、中小事業者の育成と発展に繋がる施策を実行する。
3. 小規模未来型モデル都市をつくり、産業面を含めて日本を牽引する都市にして行く。

この小論に、真剣に目を通した方はいなかったのでしょうか。ボクたちの元に、反響が寄せられることはありませんでした。現実性の乏しい、夢物語に近い提言だったからかもしれません。

ただ、ボクたちが提言したい趣旨は、ひとつでした。

経済的に自立した東北地方を創造する。

人口減少や高齢化の傾向分析を踏まえた小論は、そのために書かれたと思います。

●ことばを編むための「復興」条件

こ

とばとしての東北地方の「復興」の伝達は、着飾って踊れば良いという問題ではありません。踊るにしても、一定の実態や現状を踏まえる必要があります。大きく背伸びして伝えれば、虚言になるだけです。ある程度の背伸びは必要とはいえ、東北地方の社会構造から言って、無理は禁物です。また、全国各地で自然災害の被害に遭われた方々への、配慮が必要です。

そんなふうにと考えると、「東京オリンピックは、東京だけでやれば？」と、言いたくなるのは無理もない話です。

ことばとしての東北地方の「復興」の伝達には、条件が整っている必要があります。ボクたちの考えでは、次のようになります。

1. すべての子供たちと女性たちが、いきいきと暮らしている状態にあること。
2. 高齢者の生活環境が整い、経済的にも社会的にも不安がないこと。
3. 若者の働く場があり、結婚と子育てができる環境が整っていること。

つまり、日本が抱えている課題を、東北地方が率先して解決する実態が重要だと思うのです。それこそが、本当の意味で(Holly)の「復興」だからです。結果として、全国で自然災害に遭われた方々を含めて、心から「よかったね」と言ってもらえることを、ボクたちは望んでいるのです。

シンキング・バース新書

ボクとワタシの日本語診断
「復興」と東京オリンピック

2017年8月4日（初版）発行

著者：シンキング・バース
日本語研究班

発行者：遊佐 芳泰

発行所：**シンキング・バース**

〒021-0821

岩手県一関市三関字神田105番5号

電話／FAX 0191-23-0724

※この論考の著作権は、図表を含めてシンキング・バースに帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。